
秋空の通り雨

来々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋空の通り雨

【ZPDFード】

Z9003C

【作者名】

来々

【あらすじ】

世の中、生きているだけで疲れてくる。辛くて苦しくて泣けてくる。死にたくなる時だって沢山ある。でもそんな時は、決まって雨が降るんだ。神様と、お母さんからの贈り物。それをもらつて、私は今まで頑張れた。さあ、もう少し生きてみようか。

それはまるで、

秋空の通り雨のよう。

心の窓は晴れたまま、

雨といつも涙を流す。

こんな日の神様は、

いつたい何を考えているのだろうか。

気が付いて、一番最初に目にに入ったのは、命の温かさが感じられない、無機質な真っ白の天井だった。

ここは何処だらうか。

ゆっくりと、身体の感覚を確かめながら横を見る。

小さな窓があつたので、私はベッドを降りて、外を見てみる事にした。

少しふりつぶが、ちゃんと歩けるようだ。

窓まで着くと、ベッドの上より少し肌寒い気がした。身につけてい

る、青と白の縞模様の服が、余程薄いのだろう。

一度自分の身体を抱き締めてから、ガラスの部分に、壁に寄りかかりながら右手をやる。

ピンと張りつめた、命の通わない冷たさに、何故か懐かしさを感じた。

外に目をやると、どこか不思議な感覚になつた。

空は青く晴れているのに、強い雨が降っている。

何かが、頭の奥をかすめた気がした。

何だっけ？

そうだ。

あれは幼い頃にした、母との会話。

「ねえお母さん。なんでお空は、晴れたり曇つたり、雨が降つたりするの？」

保育園の帰り。雨上がりの道を、母と手を繋ぎながら私は尋ねた。すると母は、

「それはね、お空は神様の気持ちだからなの」

と言つて笑つた。

「気持ち？」

幼い私は、母に負けないくらいの笑顔で聞き返した。

「そう、気持ち。だから、神様の機嫌が良い日は晴れになるし、機嫌が悪い日は雨になつたりするの」

そう言つて、母は私を抱っこしてくれた。

母の胸元で甘える私。

今はもう、
遠い記憶…………。

でも、空が神様の気持ちなら、今の神様は、いつたい何を思つているのだろう。

晴れているのに、雨が降つている。

機嫌は良いのか悪いのか。

冷たい風が部屋に入ってきた。身体を震わせながら振り返つて見ると、ドアの所に、スーパーのビニール袋を持った母が立つていた。

窓際にいる私を見た母は、少しだけ恥ずかしそうに、笑つた。

あの時と同じ笑顔で、
静かに笑った。

私がベッドに入り直すと、母は何も言わずに、横にあつたイスに腰掛けた。

二人の間に流れる沈黙が、少しだけ重い。

「気が付いて、本当に良かつたわ」

母がビニール袋からリンゴを取り出しながら言つ。

「ねえ、ここは何処？なんで私はここにいるの？」

私は、少しだけ声を大きくして言つた。

母は一度下を向き、口をキュッと結んでから話しあじめた。

「…………ここは病院。覚えてないの？貴方は三日前に…………」

そこまで言つて、母はまたうつ向いてしまつた。

……病院？

ああ、やうだ。私は三日前、自殺しようとした橋から飛び降りて、それで……。

「……大丈夫。思い出したよ、母さん」

私は、今は出来る精一杯の笑顔を母に見せた。

「やう……。ねえ、貴方なんで血殺しようとしたの？何が不満なの？」

母は不安そうな顔をする。

「さあ、なんでだろ？なんか疲れつけられたんだと思つよ。世の中色々な事に」

それきり、また沈黙。

さつきよりもずっと重い。

「……神様は、今どんな気持ちかな？」

幼い頃を思い出し、私は言つた。

「……なに？」

顔を上げた母は、目に涙を浮かべている。

私は少し、声の調子を上げて言った。

「ほーり、昔さあ。空は神様の気持ちだって言つてたじやん。晴れた
ら機嫌が良くて、雨だと機嫌が悪い。だったら、今日みたいに晴れ
てるのに雨の日つて、神様は何を考えてるのかなあと思つて」

母は少し唇を噛んで、その後に微笑みながら言つた。

「……ああ、懐かしいね。保育園の頃だっけ？」

それから窓の方を見て、

「こんな天気の日はね、神様が私達に優しい日なの。私達が生きて
いる中で溜め込んだ、怒りとか、疲れとかを、涙で神様が癒していく
れるのよ。悲しい涙じゃなくて、癒しの涙で」

母は私の方を見て、もう一度笑つた。

私は母の顔を見た。

秋空の通り雨を背に、そつと笑顔でいる。

「…………私、もつ自殺なんかしないよ

自然と口から出た言葉。

その後は、ずっと母と抱き合つていた。
母は、涙を流している。

悲しみの涙ではない、癒しの涙を。

それはまるで、
秋空の通り雨のよつ。

心の窓は晴れたまま、

雨とこつけの涙を流す。

でもその涙は暖かく、私を芯から癒してくれた。

ギュッと包んでくれた。

母の涙と神様の涙。

もつ、

「疲れた」

なんて言えなによ。

雨はもう上がり、窓の水滴が輝いている。

よし、生きてみようか。

(後書き)

皆様お元気でしょうか。久々に投稿しました、来々です。今回は死について小難しく書いてみました。今はこんな世の中ですから、疲れとか、そんな簡単な理由で死のうとする人が、結構いると思います。だけれど、そんな世の中に疲れちゃった人の事を、凄く大事に思っている人もいると思うんです。中々伝わりづらいテーマとは思いますが、どうにか理解して頂ければ幸いです。では次回こそご期待下さい。来々でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003c/>

秋空の通り雨

2010年10月28日08時22分発行